

3 岡山県の水産業

1 豊かな海

岡山県の海は、瀬戸内海の中央部にあります。海岸線は、みさきや入り江が多く、その中に大小80に近い島々があります。



漁かく量の多い港

水深は、20メートルくらいまでの浅い海がほとんどです。海底は起伏がはげしく、ふくざつで、藻場（海草の多い場所）や浅瀬・干潟がいたるところにあります。そのため、魚のすみかや卵を産む場所として適しており、魚のよく育つ場所にもなっています。

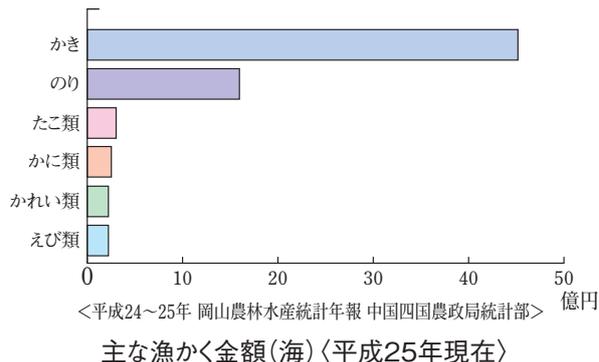
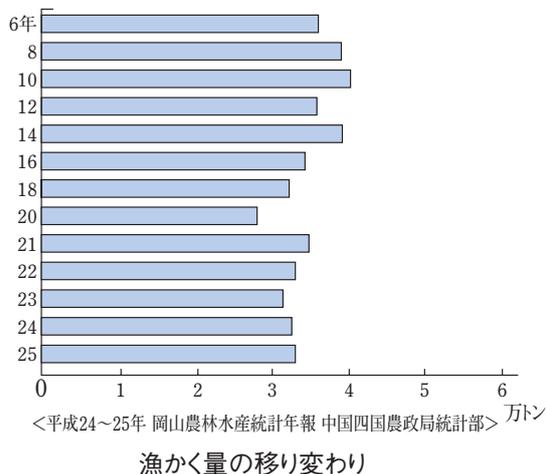
こうしためぐまれた地形を利用して、入り江や湾に27の漁港がつくられ、沿岸漁業の基地となっています。

このように、水産業をすすめていくのにめぐまれている岡山県では、むかしからいろいろな漁法を考えて、水産業がさかんにおこなわれてきました。

そこで、県内の水産業のようすや漁業にたずさわる人々の工夫や努力について調べてみましょう。



漁船がたくさんつながれた下津井港

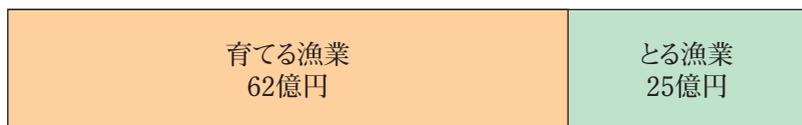


(1) とる漁業と育てる漁業

むかしから、底びきあみ、一本づり、さしあみ、つぼあみ、はえなわなどのいろいろな道具を使って、魚をとる漁業がさかんにおこなわれていました。しかし、近ごろは、昔ほど魚がとれなくなったので、育てる漁業に力を入れています。

養しよくは、計画的に育てることができるので、収入がわりあい安定しているというよさがあります。県内の海岸の近くには、たくさんの養しよく場をみることができます。

岡山県の海は、入り江が多く、波が静かなので、かき、のり、わかめ、ひらめなどの養しよくに向いています。育てる漁業は、岡山県の漁業生産額の約3分の2以上をしめるようになってきています。



<平成24～25年 岡山農林水産統計年報 中国四国農政局統計部>
海の漁業生産額(87億円) <平成25年現在>



<2013年漁業センサス(5年ごとに、全国一斉に実施)より>
<平成25年現在>



かきの養しよくいかだ

(2) 川の魚

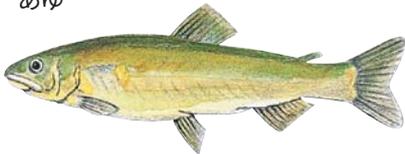
岡山県には、3つの大きな川があります。たくさんの支流しりゅうをもち、水量やえさが多いので、魚がたくさんいます。

清流にあゆを求めてつりをする人の姿すがたは、夏の風物詩ふうぶつしになっているほどです。あゆは、わたしたちの生活に古くからとけこんでいる川魚です。

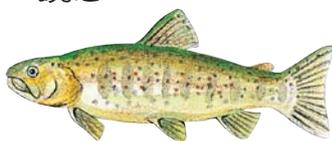
昔にくらべ、海から川へさかのぼってくる稚ちあゆが減ったので、琵琶湖産の稚あゆを買ってきて放流ほうりゅうしたり、県内で稚あゆを人工生産して、放流したりして、あゆが少なくならないように努力しています。

また、あゆのほかにもあまご、にじます、こいなどの魚も養よくされています。

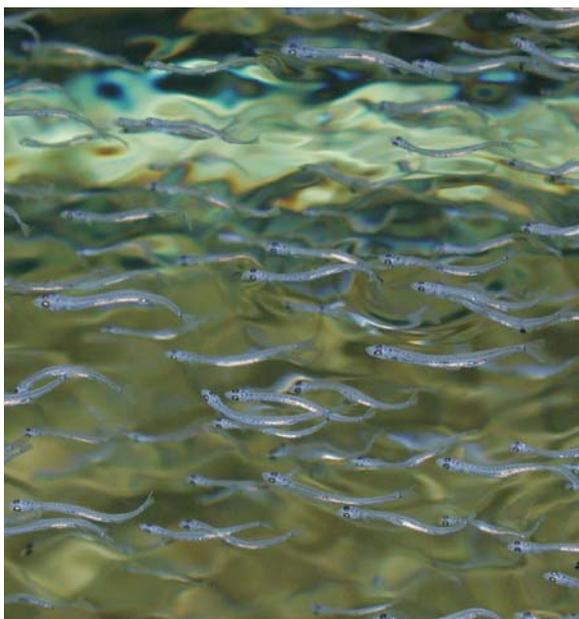
あゆ



あまご



にじます



あゆの稚魚



稚魚の放流

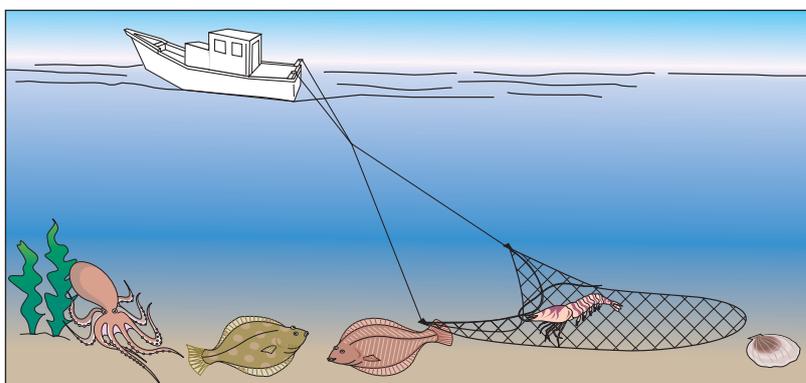
2 漁業にたずさわる人々の暮らし

(1) とる漁業

岡山県内では、おもに、小型底びきあみ、小型定置あみ（つぼあみ）、流しあみなどの漁がおこなわれています。

小型底びきあみ

ふくろのようになったあみを海底につけて、ひきながら魚介類をとる漁法です。おもには、ひらめ、かれい、えび、しゃこ、あなご、たこ類がとれます。



小型底びきあみのしくみ



底びきあみ漁船

小型定置あみ（つぼあみ）

瀬戸内市牛窓^{うしまど}の海の中から、たくさんのぼうがのぞいています。つぼあみといって、島の周りや海岸沿いの海の中にぼうをたててあみをはり、入ってくる魚をとる漁法です。近くのつぼあみ漁をしている平野^{ひらの}さんは、次のように話しています。

「多い人はつぼあみを5か所ももっています。わたしの家は、1か所だけです。つぼあみは1年中同じ場所にはっておき、午前4時半ごろに魚をとりに行き、6時ごろには港に帰ります。」

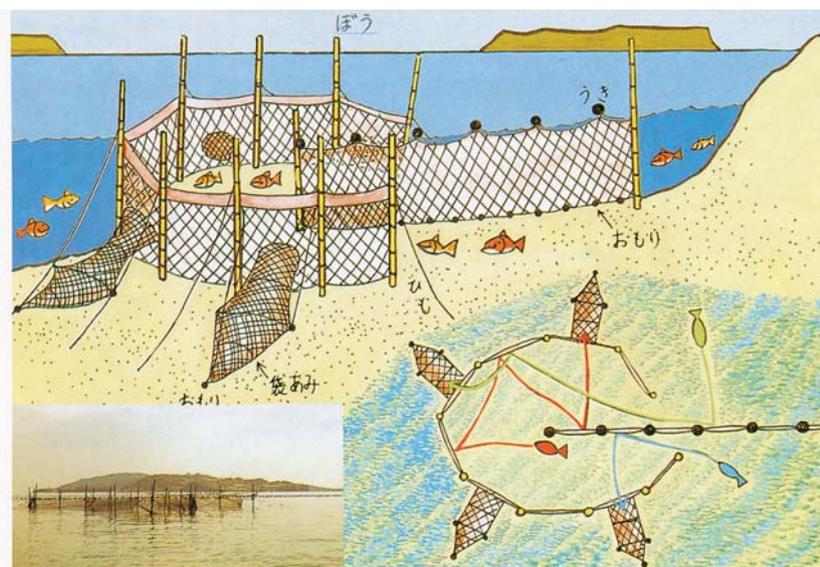
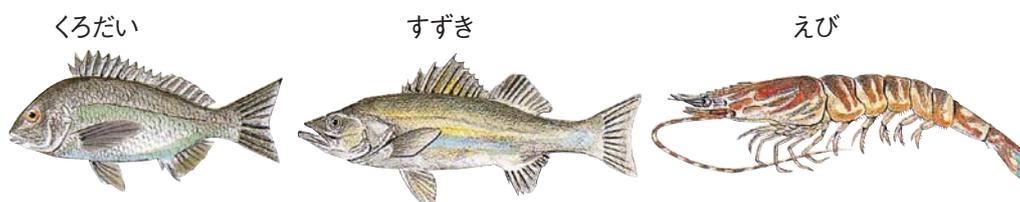


あみをなおす平野さん

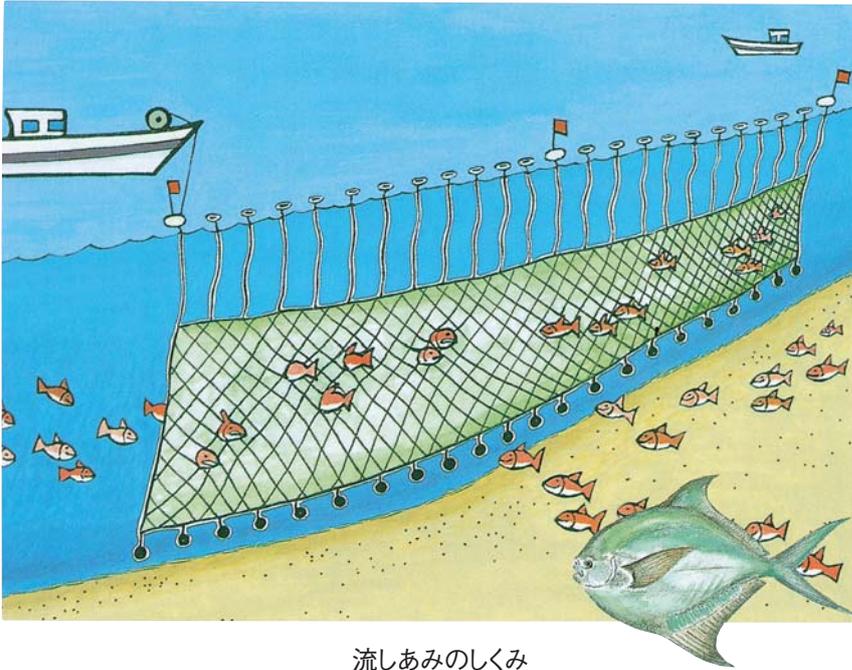
さらに、平野さんは、「魚は、あみにぶつかると、あみにそってすすむくせがあります。この性質を利用して、魚の通り道をあみでさえぎり、魚をうまく袋あみに追^{ふくろ}い^こ込んでいきます。袋あみをあげたとき、たくさん魚が入っているととてもうれしいものです。」と話していました。

しかし、藻^もや小さな生き物の死がいなどがつくと、あみの目がつまり、海水が流れなくなり、魚がとれなくなります。特に夏の間はつまりやすく、1週間に1回ぐらい、冬でも、3週間に1回ぐらいあみを上げてほすそうです。

また、笠岡^{かさおか}の海の深い所では、ぼうのかわりに、うきだるを使っているそうです。



つぼあみのしくみ



流しあみのしくみ

まながつお



さわらの引きあげ

流しあみ

岡山近海の瀬戸内海では、5月から6月にかけてさわら^{りょう}漁，7月から8月ごろにかけてまながつお漁がさかんになります。

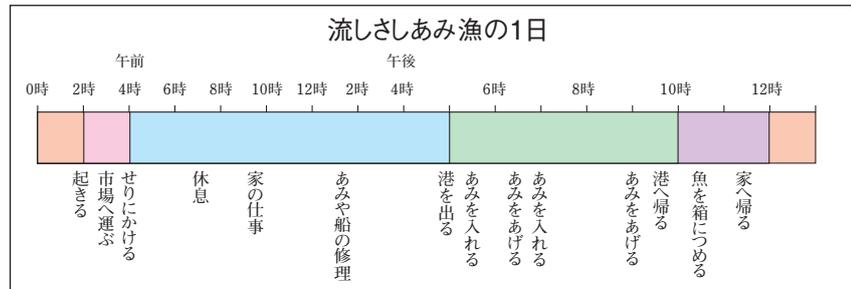
午後10時ごろ，豊田^{とよた}さんの漁船が港に帰ってきました。休むひまもなくとろ箱に魚をつめ，次の日の朝，せりにかける準備^{じゅんび}をしています。

次の日，潮^{しお}の様子をみて，午後5時に漁^{りょう}に出ました。犬島の沖までくると，たくさんの船があみをおろしていました。となりの船のあみとからまないように少しはなれたところで，豊田^{とよた}さんは船をゆっくりと進めながら，およそ500メートルのあみをていねいに海におろしました。2時間ほどして，あみをあげにかかりました。船のライトにキラキラ光るものが見えます。まながつおです。あみにかかった魚が少なかったので，場所を変えて，豊田^{とよた}さんは，2回目のあみを海に入れました。今度は，たくさんのまな



あみをととのえる豊田さん

がつおがあみにかかり，魚をはずす豊田さんの手もとてもかろやかでした。午後9時をまわったところで，港に向けて帰りました。



漁場へむかう漁船



魚を港へおろす漁船

(2) 育てる漁業

① かきの養しよく

瀬戸内市邑久町虫^{むしあけ}明では，海の中にいかだのようなものがたくさんあります。かきいかだというかきの養しよくに使うものです。かきの収かく量も，かきいかだの数

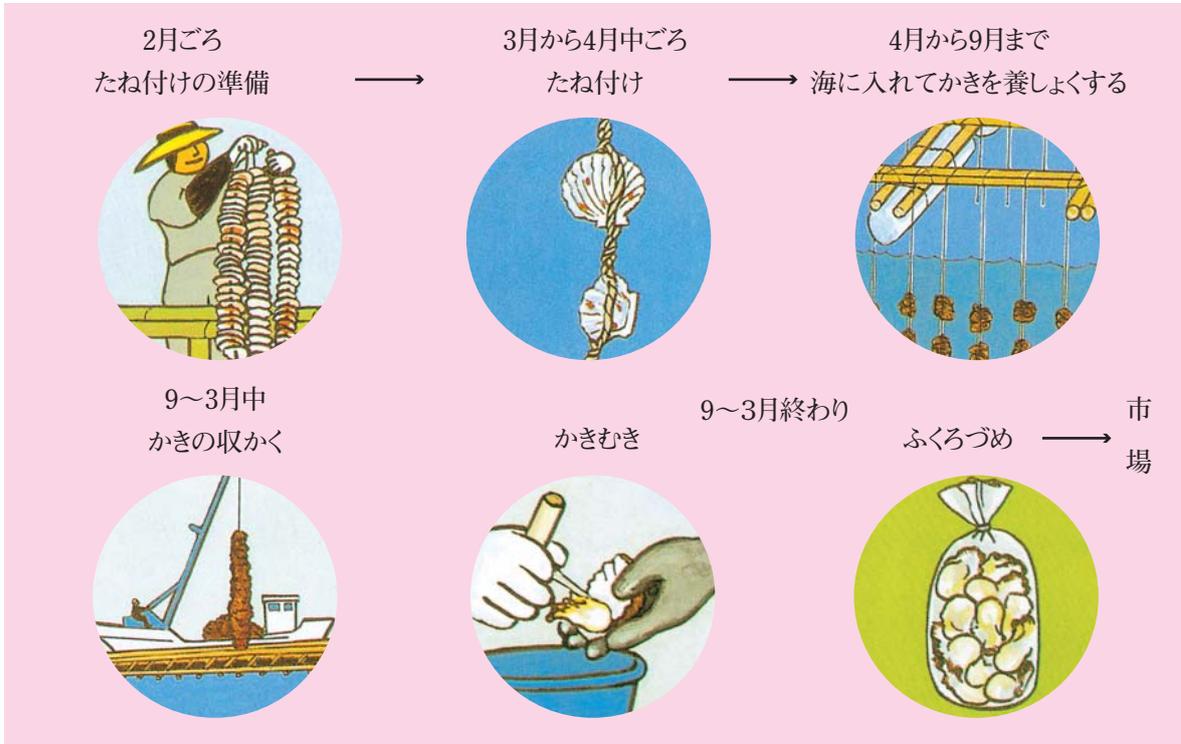


かきの収かく

も，かきを養しよくしている人の数も，このあたりが岡山県で多

いところでは。また、岡山県のかきの収かく量は、広島県について第2位です。

かきが取れるまで



邑久町漁業協同組合の^{とまだ}筈田さんの話

かきの養しょくを始めて、安定した収入が入るようになりました。かきは、えさをやらなくてもいいので、ほかの養しょくに比べて、^{てま}手間はかかりません。し



かし、台風がきて、大きな波がくるとかきが落ちたり、海水の温度が高くて育たなかったりするので、いつもかきがじょうぶにたくさん育ってくれることを考えています。秋から冬にかけての取り入れは、寒くてたいへんなのですが、質のよいものがたくさん取れたときは、とても気持ちのよいものです。

学習ノート

1 育て方

◦ かきのたねは、虫明で作ったものと、広島県から買ったものをおもに使う。

◦ かきいかたは、竹を組んで作り、ふつうはたて9メートル、よこ24メートルの大きさである。

◦ 9月に入り、あるていど潮の流れている沖の方に方へいかたを出すと、かきのえさが多いので、どんどん大きくなる



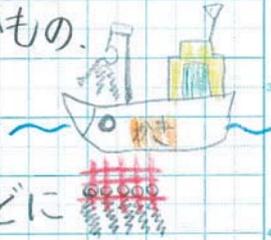
◦ 収かくの時期は9月の終わりとくから3月の終わりまでである。とくにいそがしいのは、12月から1月ごろまでである。

2 エ夫していること

◦ かきは、たくさんえさを食べるので、いかたの数を少なくして、かきの身が大きいもの、形のよいものを育てる。

◦ いきのよいかきを出荷する。

◦ 現在は、大阪、東京、名古屋などに出荷している。



② のりの養しよく

のりの養しよくをしている^{たけだ}竹田さんは、10月になると、岡山市南区^{こぐし}小串の港から、毎日海に出て、半日以上のりを見てまわります。天候によって変化するのりの成長のようす^{てんこう}を見ているのです。11月10日ごろから、のりのつみとりが始まると、午前5時には出港します。

午前8時半ごろ港に帰ってきた竹田さんは、さっそく船からポンプで、海水といっしょにつみとったのりを貯蔵タンクへ送ります。

海水でのりをよくあらった後に、専用の機械にかけて小さく切ります。それを、水道の水であらい、「調合機」にかけてから「すき機」に入ると、脱水・乾燥までされて、のりとなります。

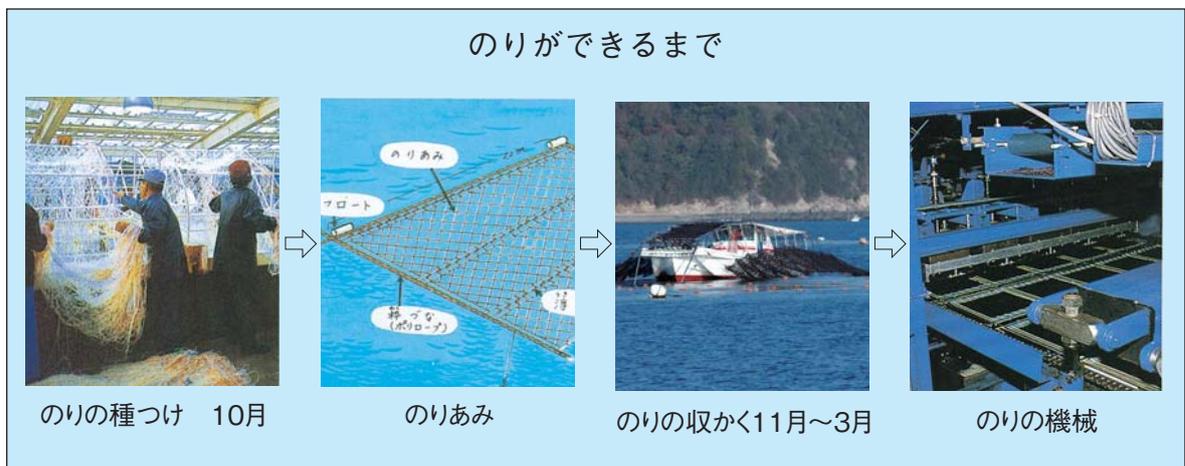
最近では、より質のよいのりに仕上げるために、「異物除去機」という新しい機械を使って、エビなどの余分なものを取りのぞいています。

こうして、つみとってきてから7時間かかって1万枚ののりができます。それを「選別機」でより分け、100枚ずつたばにします。これらの作業はほとんど機械がしてくれます。

この間、竹田さんのおくさんは、機械の調子をじっと見えています。

昭和50年代に入って、全自動の機械が使われるようになると、漁場の大きな漁業協同組合は、たくさんのにりをつくり出すようになって、のりはあまるようになってきたそうです。

そこで、竹田さんは、のりをたくさんつくるよりも、品質のよいものをつくるように努力しています。



3 これからの漁業

最近、瀬戸内海では、魚が少なくなってきました。そこで、魚が住みつきやすくするためにコンクリートブロックや石を海にしずめたり、海草を育てたりしています。また、魚やかにの卵を人の手でかえし、稚魚を海や川に放流し、自然の中で大きくしてからとる栽培漁業も進んできています。今までのとるだけの漁業から、水産資源をふやしながらとる「つくり育てる漁業」への努力もおこなわれているのです。

魚・かにの種苗生産

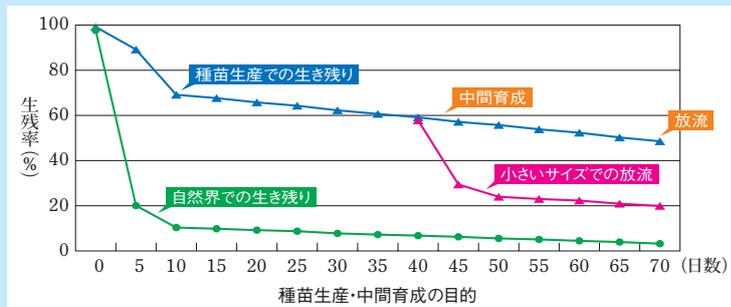
これからの漁業のことを調べるために、わたしは瀬戸内市牛窓町にある岡山県農林水産総合センター水産研究所を見学しました。



岡山県農林水産総合センター水産研究所(瀬戸内市)

種苗生産や中間育成ってな～に？

魚や貝はたくさんの卵を産みますが、ふ化してもすぐに食べられたり、餌を見つけられず、ほとんどが生まれて10日以内に死んでしまいます。種苗生産は、人工的に安全な場所で、十分な餌を与えて、たくさんの稚魚を生産することです。また、中間育成は、放流後の海での生き残りを増やすために、より大きく育てることです。



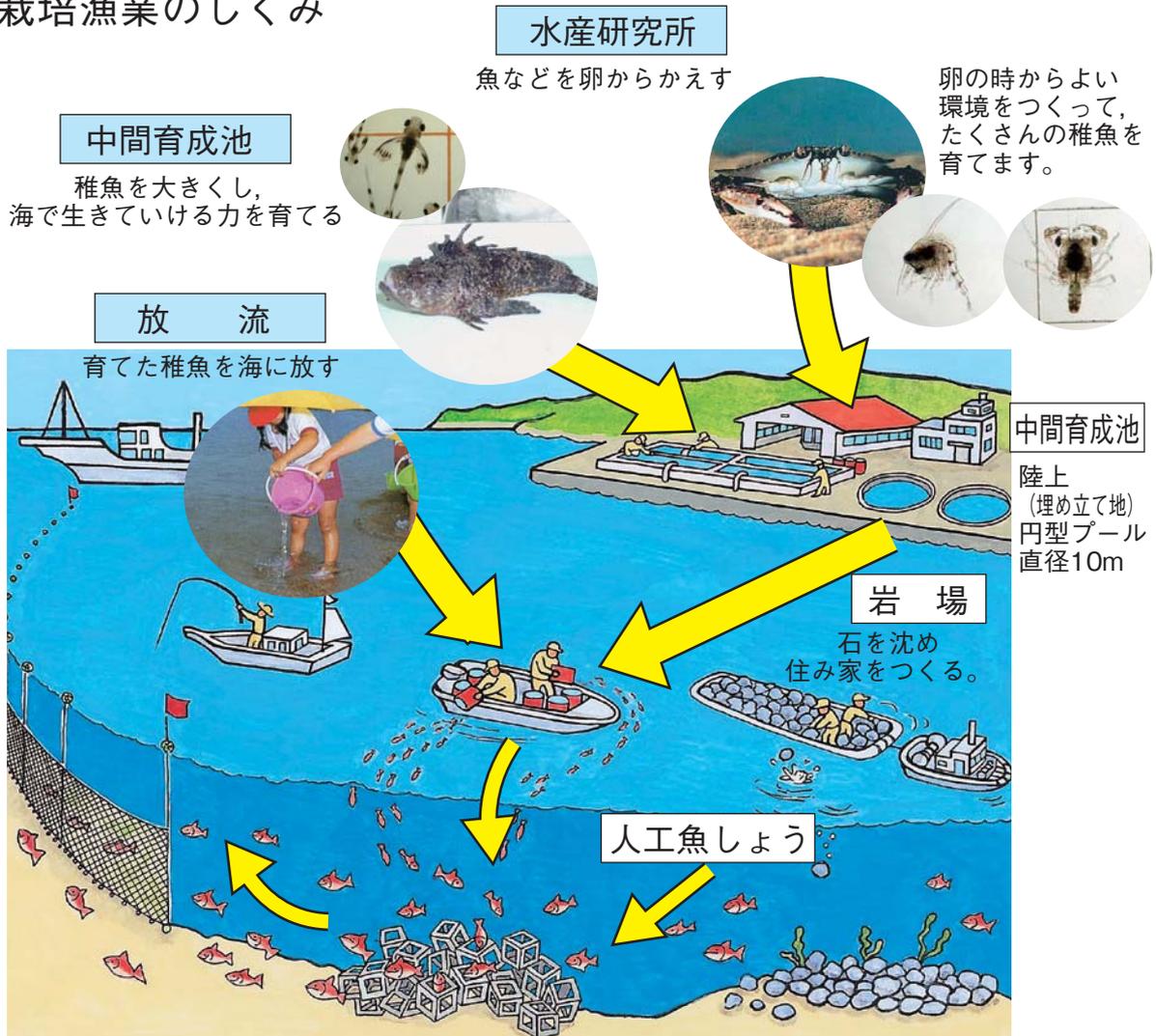
水産研究所の人のお話



水そうの中をよく見てごらん。小さな魚が泳いでいるでしょう。卵の時からよい環境をつくって、たくさんの稚魚ちぎょを育てているのです。

えびやかには、短い期間で大きくなるので、育てるのに都合がよいのです。また、おにおこぜは、おいしくて人気があることから栽培漁業に適しています。海へ放したおにおこぜが、たくさんとれた話を聞くと、とてもはげみになります。

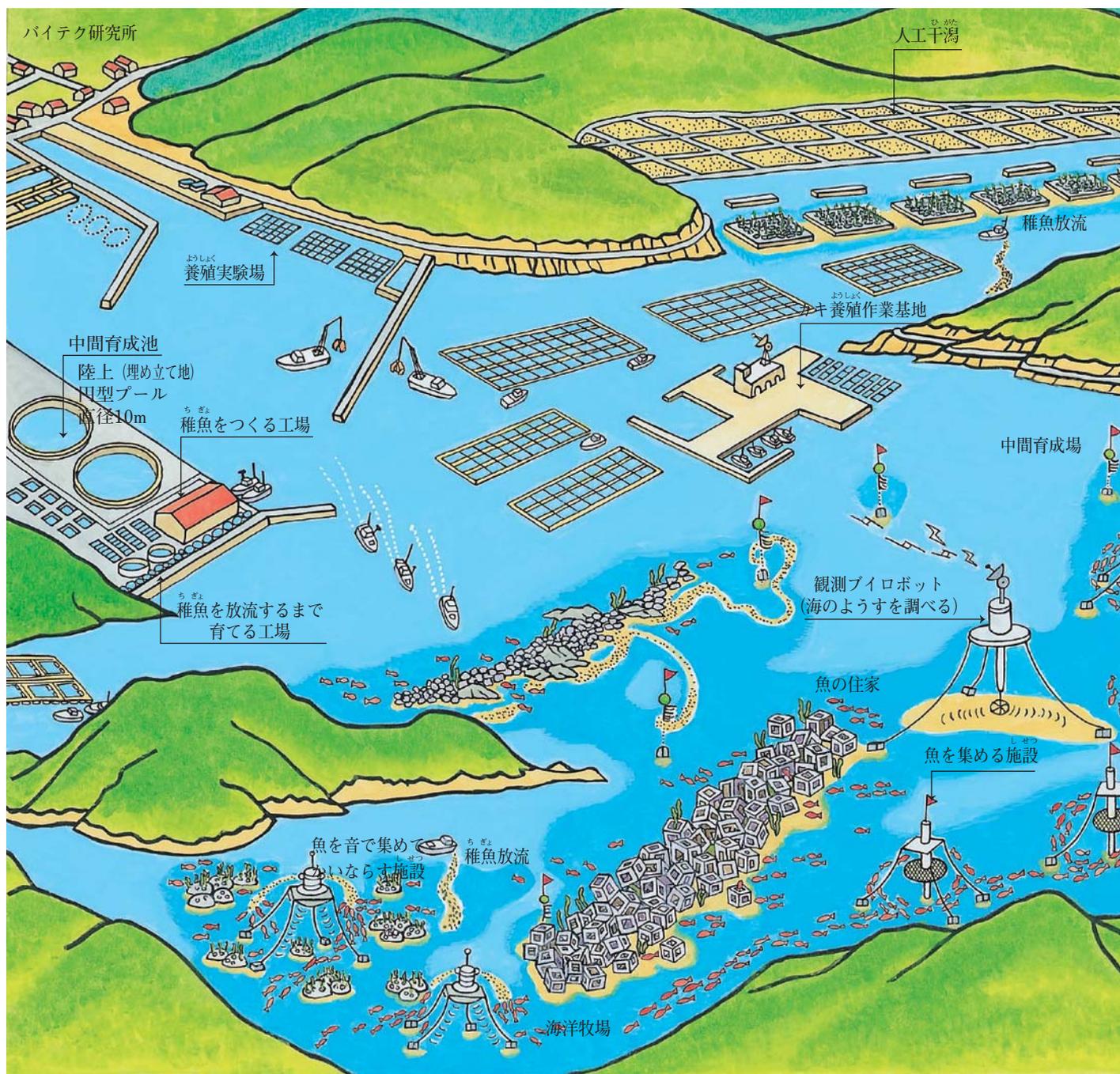
栽培漁業のしくみ



栽培漁業のしくみ

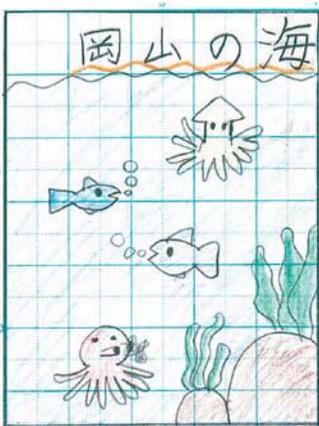
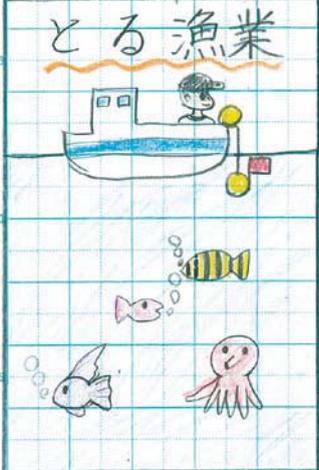
これからの計画

岡山県では、元気でじょうぶな稚魚ちぎよの大量放流や、音とえさで魚を集めて飼かい慣ならす技術を使って、海洋牧場づくりなどをすすめています。さらに、藻場もばづくりや稚魚ちぎよを保護する施設ほごの設置しせつをおこない、小さな魚はとらないようにするなど、育てる漁業を発展させていきます。



これらのことをすすめることで、漁業がさかんになり、私たちも新鮮しんせんでおいしい魚がもっとたくさん食べられるようになるでしょう。

学習ノート

<p><u>岡山の海</u></p> 	<p>浅くてプランクトンなどの魚のえさが多く、もがたたくさんある所も広いので魚が住みやすく卵を生むのにもよい。</p>
<p><u>とる漁業</u></p> 	<p>小型底引きあみや小型定置あみ、流しあみなどを利用して漁師さんは魚をとっている。</p>
<p><u>育てとる漁業</u></p> 	<p>のりやかきなどを種つけて、育てたり、卵をかえし稚魚を放流して大きくしたりして、魚などをたくさん取る工夫をしている。</p>

つくり育てる将来の漁業

